



## 「サ高住」づくり運動開始

やっぱりここに住んでよかったと思える「住まい」をつくりたい

介護事業部長 阿部未知

「住まい」は人権保障の基本です。高齢や疾病で介護が必要になったり、独居で不安を抱えながら、住み続けることが困難になる方が増えています。そんな方々が、住み慣れた地域で安心して生活できるように、京都保健会として初めてのサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）を上京病院跡地に2016年1月オープンします。3月には友の会、職員への説明会を2回開催し、設計者を決めるコンペを5月に開催します。

上京病院が地域に支えられて歴史を刻んだ地域は、誰もが人間らしく尊厳ある人生を送り、今まで以上に人と人とのつながりがある街づくりをすすめ、民医連がめざす、あるべき地域包括ケアをつくっていきける地域です。

子どもから大人まで立ち寄りやすく、そこへ行けばいつも誰かが、何かをやっている。地域交流の場にし、町内会や商店街とも、顔の見えるご近所付き合いで、地域と共生できる「住まい」をつくりたい。また、住み替えたとしても、今までの「暮らし」の延長で、その人らしさが追求できる、「住まい」をめざします。介護が必要になっても、部屋にこもらず、ふれあいのある空間をつくって、入居者が交流できるようにします。「ここに住みたい、これなら住める」と思える費用の設定にも最大限努力します。「地域に何が望まれているのか」を大切に考えながら、共同組織、多職種・他法人とも積極的に連携して、皆さんに喜んでいただけるものをつくり上げましょう。



職員を対象としたサ高住説明会

## 綾部・福知山エリア構造転換事業スタート

京都協立病院事務局長 稲次豊

一番の中心課題は、京都協立病院の医療構想と経営改善です。京都協立病院の持つべき医療機能は、「周辺公的病院がDPCと慢性期に二極化する中、亜急性期からリハビリ在宅維持期までのつなぎをカバーする役割。高齢化とアクセスの悪さ（医療機関密度の低さ）が地域の特徴、在宅医療とその支援は大きなニーズがある」（第二次プロジェクト会議答申）としました。「亜急性期に軸」を置き、急性期病院からの転院を積極的に受け入れ、そして他の事業所とも連携を強めながら在宅復帰を支援します。病棟機能は、4階一般病棟を一般病床+地域包括ケア病床とし、3階療養病棟は回復期リハビリテーション病棟に変更します。常勤医2名と厳しい医師体制になります。京都市内・北部ブロックからの支援を受け、ポジショニングを定める必要な機能転換をすすめながら経営改善をはかっていきます。

二つ目に、日常的に連携・役割分担している、あやべ協立診療所エリアとふくちやま協立診療所エリアの事業展開です。築33年経過しすべてにわたって老朽化しているあやべ協立診療所は、全館リニューアル工事をしています。建物は現行6階建てを3階建てとし、1階は診療所機能、2階は現行の介護事業（訪問事業、デイサービス、居宅介護支援）、3階は新規介護事業（複合型サービス）を開設します。7月上旬、2015年1月完成、耐震工事も施し安心・安全の医療・介護を提供します。ふくちやま協立診療所エリアは、STきぼうを診療所と同じ敷地内に移転し、通所リハビリを開設します。「地域包括ケア」が前面に出る年。法人内の事業所や他医療機関、介護事業所とも連携を強めながら、地域完結型医療・介護をめざしていきたいと思えます。



全面改装するあやべ協立診療所